

## 保育者の保育観はどのように形成されるのか

—藤野敬子の生育歴に関する検討—

永倉 みゆき\*

### How to Construct A Kindergarten Teacher's View of Education:

Considering the Life History of Kindergarten Teacher, Keiko Fujino

Miyuki NAGAKURA

#### Abstract

The purpose of this study is to demonstrate how to construct a view of education for the kindergarten teacher. I want to explain this by the life history of one kindergarten teacher—Keiko Fujino. She was born in 1926 and experienced an educational reform after World War II as a kindergarten teacher. She spent 66 years as a kindergarten teacher and advocated a “Child-Centered education” all her life. How did Keiko construct such a firm educational view? Did her viewpoint on education change at any part in point? If so, what caused it to change? A kindergarten teacher's view of education is affected by her historical background, family, coworkers and relations with the child and so on. I have attempted to demonstrate Keiko's viewpoint on education by examining her life and thereby showing what caused her to formulate her educational viewpoint. This paper focuses on Keiko Fujino's family background and the education that she received.

Keywords: kindergarten teacher, construct the view of education, life history

#### 1 はじめに

保育は保育者が子どもに対して持つ願いを元に行われる営みであり、この願いは保育者の持つ保育観に基づいている。それでは、保育者の保育観はどのようにして形成され変化していくのだろうか。また保育者が職業人として経験したことは、その保育観形成にどのように影響を与えるのだろうか。

保育観についての先行研究からは、保育観の形成過程には保育者が範とする保育者の思想の影響があること<sup>1</sup>、保育実践の中で自身の信念を再構成しながら成長を遂げること<sup>2</sup>、保育者の個人史にある経験に加え、学習した理論、同僚からの影響などの要因が影響を及ぼすこと<sup>3</sup>、などが明らかになっている。他にも保育者養成校で学ぶ学生のもつ保育観の変化に関する研究は多くなされている。一方、「保育者アイデンティティの形成」「保育者の専門性の向上」という切り口では、近年多数の研究がなされており、例えば足立は、保育者の成長について、各ライフステージに応じた危機を乗り越える経験が重要であることを量的研

---

キーワード：保育者、保育観形成、生育歴

\* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

究から明らかにし、それを通じてアイデンティティを生涯発達し続けていく存在であることを示している<sup>4</sup>。また、香曾我辺は、複数名の保育者への半構造化インタビューにより、保育者が専門家として熟達していくプロセスを、自己形成という形での生涯発達と、保育コミュニティとの関係という2つの観点から明らかにしようとした<sup>5</sup>。このような保育者アイデンティティや専門性に関する研究も「保育観」の形成過程を考える上での示唆に富んでおり、保育観の形成には、社会的背景、保育者が学んだ理論、関わった人、危機を乗り越える経験も含めた実践における経験などが深く絡み合っていることが言えよう。これらを明らかにするためには、保育観がどのような影響を受けて形成され、変化していったのかについて、一人の保育者の生涯を通じた研究が求められる。

本研究では、戦後日本の教育が大きく変わった昭和20年代に幼稚園教諭となったひとりの保育者の保育観の変化を、本人へのインタビューに加え、紀要等の研究物、著作物や講演録等の資料を元に辿ることによって、保育者の保育観形成の過程を明らかにすることを最終的な目的とする。本稿では、保育観形成過程を研究するに当たり、まずは保育観の形成についての理論的な枠組みについて検討した上で、保育観形成の土台となる生育歴の部分について考察する。

## 2 研究の方法

### 2.1 保育観をめぐる様々な言説

森上は、発達研究の世界には、一般的に使用される「児童観」を、実際の子育てや保育などの実践と密接に結び付けて捉えるものとして「児童発達観」という言葉があり、これは児童観の中に子どもの発達過程とそれへの働きかけ方についての考え方を含んだものであると言う。そして金澤が、「保育をどのように行うべきかということに関する保育者の考え」を「保育観」と捉えている<sup>6</sup>ことを取り上げ、ここで言う「保育観」は、この「児童観」「児童発達観」とほぼ同じ内容を含みつつも、実践の当事者である保育者がもっているものであることをより強調した表現であるとしている<sup>7</sup>。森上や金澤は、子どもという存在の捉え方である「児童観」「児童発達観」をもとに、保育者が保育をどのような行為と考え、行うかが「保育観」であると捉えている。「保育観」に近いものとしての「児童発達観」については、発達心理学の立場から小嶋が「子どもの発達の变化や人間形成に結びつく過程についての大人の考え方に関心を向けるのが、児童発達観という概念である。」と述べており<sup>8</sup>、「広い意味での子ども（乳児～青年）の発達と教育に関して、人間が個人的に、または集団的に抱いているある程度体系化された考え」<sup>9</sup>であると定義している。また同じく発達心理学者の矢野は、「児童観」や「発達観」とは、子どもがどのように考えられているのか、子どもの発達・成長がどのように考えられているのかということであるとした上で、その中にある子どもや発達をどう見るのかという認識の側面と、実際に子どもをどう扱い、社会的にどう位置づけるのかという行動や実践の側面は、区別はできるものの、深く結びついていて切り離せないものだとしている<sup>10</sup>。このように大人が子どもに関わる時には、子どもをどのような存在として捉えるのかという認識や、実際にふるまいとして現れる行為の中に、子どもの発達についてのある考えが互いに関連しつつ存在しており、それが「児童観」「児童発達観」「保育観」などと呼ばれているのである。

以上より、「保育観」には、子どもという存在、またその成長をどのように捉えたかという保育者自身の人間観・価値観に基づく認識的な側面と、どのように働きかけようと考えたかという具体的場面における意識的・意図的な側面、それが実際に行為や言葉となってどのように表されたかという表出的な側面などが互いに関わりながら存在しており、保育する者は、それらをもとに保育をつくりだしているのだと考えられる。筆者は、保育観を「子どもをどのように捉え、どのように関わるかについての保育者の考えや態度」と捉えて考察を進めていく。

## 2.2 理論的枠組みの検討

小嶋は、児童発達観について、大人が社会的・文化的・歴史的要因や生育歴等の背景を元に作り上げた児童発達観をもって子どもに関わり、関わったことにより、子どもからも影響を受け、その上でまた関わる…という具合に児童発達観は固定的なものではなく、大人と子どもの相互作用の中で変化していくものであると述べており<sup>11</sup>、その関係を示したものが図1である。

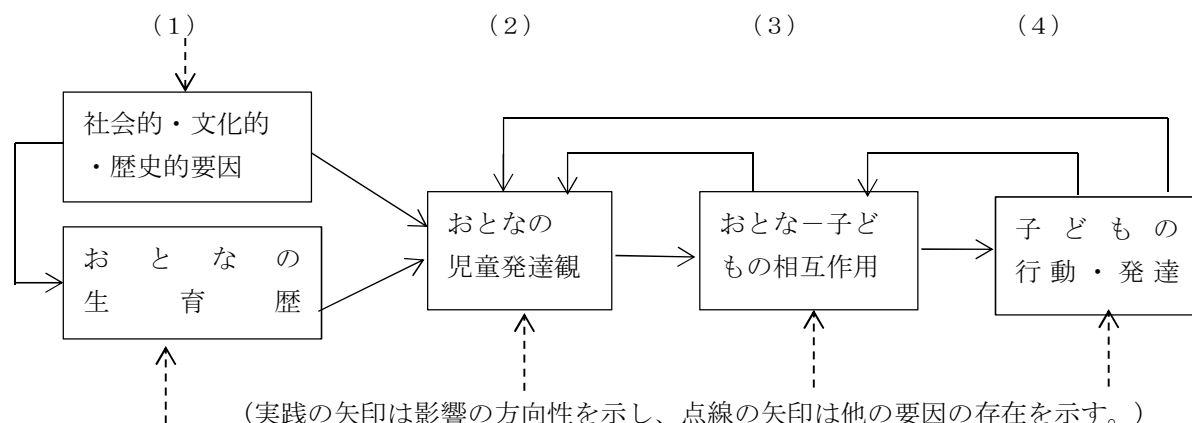


図1 児童発達観に関する諸要因の相互規程関係の図式(小嶋)

(村山英治編著, 1988『教育心理学の歩み』p. 123)

これは、個人が子育てをする上で児童発達観の形成過程を表した図であるが、この図を参考に、藤野の保育観の形成過程について以下のように表した。「社会的・文化的・歴史的要因」の部分には保育に関する歴史的な背景を入れ、「おとなの生育歴」はそのまま藤野の生育歴とした。「おとな-子どもの相互作用」の部分には、保育の過程の「子ども理解・行為・省察」にあたりと捉え、子どもの表れに応じて保育者自身が変わっていく過程とした。また「子どもの行動・発達」の部分には、広い意味での「子どもの表れ」とし、行動や発達という形にならないものも含む「表出されたもの」とした。また、「子ども理解・行為・省察」や「保育観」に影響を与えた要因のうち、藤野が職業人としての保育者であったことは大きな意味を持つため、それを考慮して保育者としての経験を特に取り上げて表すようにした<sup>12</sup>。

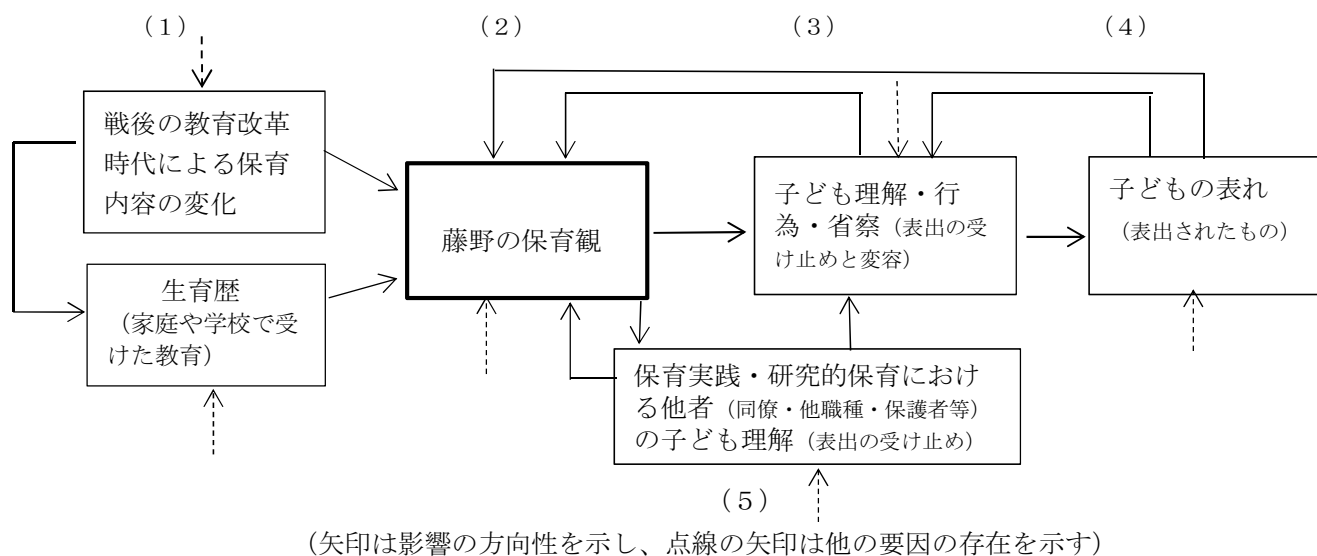


図2 藤野の保育観に影響を与えた要因の関係図

小嶋「児童発達観に関する諸要因の相互規程関係の図式」(図1)を援用し作成

このうち、本論では保育観形成の核に当たる藤野自身の「生育歴」について検討し、それが保育観に与えた影響について考察する。

## 2.3 分析の方法

本研究の対象者、藤野敬子（1926（大正 15）年－2017（平成 29）年）は、第 2 次世界大戦開戦前の 1943（昭和 18）年に幼稚園教諭となり、戦後の教育改革という大きな変革の時代をくぐり抜けてきた人物である。静岡大学教育学部附属幼稚園（以下静大附属幼稚園）に 30 年余に亘り勤め、副園長であった平成元年には、幼稚園教育要領改訂の際のワーキンググループの一員として「子どもを主体とした保育」を実践の中で現し続けた。本論で研究対象とする生育歴については、可能な部分は資料で補いつつ主に本人のインタビューにより明らかにする。

## 3 藤野の生育歴の検討

### 3.1 藤野の保育観に影響を与えたと考えられる出来事

藤野の生育歴の中から、①両親の影響 ②松山東雲高等女学校で受けた教育 ③キリスト者の弾圧 ④保育をはじめたきっかけの 4 つの出来事を取り出して考察する。これらは藤野のインタビューの中で繰り返し語られた事柄であり、その意味からも藤野自身大きな影響を受けたと考えている出来事であると言える。

#### ①両親の影響

藤野の育った家庭は、当時の家庭としては進歩的な雰囲気をもった家庭であった。父親<sup>しげり</sup>滋は一高で英文学を学んだが、芥川龍之介や菊池寛というそうそうたる同級生に圧倒され中退した後、故郷である松山で英語教師になる。唯一出版した翻訳本はジョージ・ギッシングの『ヘンリ・ライクロフトの手記』であり、これは英文学者で作家である北條文緒からは、戦後における最も優れた翻訳であったと評されている<sup>13</sup>。藤野の母親ひさは、初婚に破れた後、故郷である福井を出て東京駿河台の YMCA で裁縫の資格を取り、技芸女学校で教師をしていた時に滋と出会い、結婚する。藤野の談では、この YMCA 時代にひさはキリスト教に触れ、羽仁もと子の「婦人之友 友の会」<sup>註1</sup>を知ったのだという。「婦人之友 友の会」は「家庭生活合理化展」<sup>註2</sup>を全国で開催したが、藤野が小学校 2 年生の時に松山で開かれた「家庭生活合理化展」に友の会会員であるひさが手伝いに行った際、同行した藤野は自由学園の卒業生がきびきびと説明する様子や自由学園の生活の映画を見る機会を得る。それは田舎でのんびり生活していた藤野にとってショッキングな出来事だったという。このことにより、自分で自分を律するという自由学園の教育が藤野にとって憧れの存在となった。また羽仁もと子は幼児教育の場として「幼児生活団」を作っており、藤野は幼稚園に勤めた後には、これに憧れたと語っている。これらの思いは後に幼稚園教員の職を辞しての ICU（国際基督教大学）への入学に繋がっていく。

このような両親ともに東京での生活の経験があり、英文学やキリスト教を身近に感じるといった家庭環境の中で藤野は育つ。また藤野家は正岡子規の親類であり、父方の祖父が伊予銀行の頭取、母方の祖父は外交官という松山における名家であった。このことは、藤野にとって誇りでもある一方で、そのことによりひいきされるという苦い経験も生み出す元となる。藤野は次のように語っている。

東雲小学校って、今でも大きいんですけど、1 学年が 300 人あるんです。3 番目の（担任の）先生に、私、ひいきされて 300 人の総代になったんですよ。どう考えても、私小さい時…幼稚園に行かないで病院にいましたからね…ひいきされたってことも歴然と自分で感じていたんですよ。<sup>14</sup>

更に、昭和15年に受洗した藤野は、父が英語の教師であることもあり、戦争が終わるまでの間は非国民と呼ばれる経験もする。また、藤野は静岡に移住した頃に、父の影響で英語教員になる試験（文検）を受け失敗している。

文検っていうのがあって、これは検定で免許が取れるという制度で、若い時英語受けて滑ったんですよ。最後の文検っていうのが、私が英語を始めて（注：松山東雲高等女学校で）すぐにあって。…最後の検定のとき、父が「また無理だな」って言うけど、最後だから仕方ないって受けたら、案の定滑ったのね。終戦後、20年頃静岡に来て、まだ遊んでいる時。その時に果たせなかったんだけどICUに行ったら、教育学科に入ったら何かの免許を取りなさいっていうので、英語を取ったんですね。それだもんで中学の英語の先生になれたから（注：ICUから戻った後1年間、静大教育学部附属中学で英語を教えた）父は喜んだの。自分が英語の教師だったから、やっと英語になったって喜んだの。でも私は、英語の先生を一生やる気は元々ないですからね。<sup>15</sup>

敬愛する父の思いを受け英語教員の免許を取得し1年だけ英語の教員をしたものの、藤野は幼稚園教諭になりたいという思いを貫く。幼稚園教諭になった藤野に父は、『PARADISE of CHILDHOOD — A KINDERGARTEN GUIDE』EDWARD WIEBÉ (GOLDEN JUBILEE EDITION)という厚い古書を贈っている。藤野はそこに、父の幼稚園教師になることへの励ましを感じたのではないだろうか。母の憧れであった自由学園の教育と、父の望みであったであろう英語の教師という職業、これらに対する思いもまた藤野の人生上の選択に影響を与えている。

## ②松山東雲高等女学校で受けた教育

藤野は当時、県立の城南女学校や城北女学校といったいわゆる一流校に行かず、ミッションスクールであった松山東雲学園で学んでいる。それは、藤野が少し体が弱かったという理由もあったのだろうが、京都大学を出て、京大総長の娘と結婚して将来を嘱望されながらも故郷に帰ってミッションスクールの校長になった西村郁夫校長の生き方を、藤野の父が尊敬していたという理由が大きかった。

藤野が通ったミッションスクール—松山東雲高等女学校の特徴はその自由な校風であった。

・ ・学校の違いうっていか、教師が君臨してて、生徒が下にあるじゃなくて、教師も生徒もみんな一緒に膝まづいているというミッションスクールは全然違ったので、そこでびっくりしたんですけれどね。今でも考えると、あの女学校のユニークな教育がふっと私の保育のいろんな時、土台になっているんですね。

選択科目っていうのが割合たくさんあって、自由に選べるってことがあった。選べるってことの楽しさもその時に教わったの。それと、自習時間っていうのがあるんですけど、その時に体の弱い人は体育館のバルコニーで日光浴するんですよ。日光浴する洋服っていうのがあって、それに着替えて、日光浴する時間があつたりと、とにかくその人の個性や能力に合わせて、必要なコースを様々に多様に提供して下さるっていうのがひとつあったんですね。そういうのも後の幼稚園で、子どもが選ぶこととか、そういうのが好きになったのは、やっぱりそういうのを（それまでは）こちらが受け身でしていた時に、経験したことが大きいと思うんですね。

この教師も生徒も神の前では同じ“人”であるというミッションスクールの姿勢が、後の藤野の子どもを有能な存在として見る見方につながっていく。そして、日光浴を自習時間に行うというユニークな授業内容を体験したことにより、「学び」とは、それまで小学校で経験した（多くの日本の学校で行われていたような）机の上で、知識を頭に入れていくというものばかりでないことを、藤野は実感と共に知ることになる。そしてまた、ここでの教育の中にあつた個人主義に基づく「個人の違いを尊重する」という態度は、

藤野に「自分で考えて選ぶ」ことの大切さを植えつけた。ここで経験した個性的な教育方法の中では、次のようなことも印象強く残っているという。

たとえば遠足ですと、行きは全校生徒が揃って行くんです、目的地まで。でも帰りは違うんです。私の女学校は、松山に行くとおわかりになるんですけど、松山市にお城山っていうのが真ん中にありまして、そのお城山の中腹にミッションスクールがあったんですね。ですから、かなり遠く離れた所からでも、お城山ははるかかなたに見えるんです。で、帰りはね、パーっと自由に放されて、自分で好きな道を選んで、とにかく3時までは学校に帰り着くように、ただし、一人になってはいけないっていうだけで、ぱっと放されるんですよ。どっちの道に行こうか、こっちの方がよさそうだね、あ、誰か先客があった、あ、こっち行こう、まよいそうになると、ふーっとお城山を見ると、方角だけは合ってるわけですから。それでいろいろ自分たちで思って、無事にたどり着くの。それも面白かったんですね。だから、選んで、自分で各自考えてするってことの楽しさを、女学校の時に私は教わったのが、やっぱり保育者として強かったんじゃないかなと思うんですよ。<sup>16</sup>

藤野自身が語っているように、この個人の自由な選択を尊重する松山東雲高等女学校での経験は、それまでの教育の中で受け身になって教師に従うことを経験してきた藤野にとっては常識を覆されるような出来事であった。

### ③キリスト者の弾圧

戦争中の日本社会の中では、キリスト教徒は苦しい立場に立つこともあった。松山東雲高等女学校で受洗し家族と共に教会に通った藤野は次の様な経験もしている。

松山の佐藤牧師っていう人が偉い人でね。とっても。日曜学校、教会にね、戦争中だから「靖国神社」に参拝しろって話があるわけですよ。それをみんなで相談したけど、佐藤牧師だけは絶対に行きたくないって言ってね。そういうの貫いたんですよ。あの時は大変だったんですよ、キリスト教は、弾劾があって。・・・佐藤牧師は地味な人だったけど、軍部に反対して、靖国神社参拝なんかもどうとう行かなかったんであすよね。お嬢さんが私たちの学校のちょうど下級生でした。とてもよくできる人でしたけどね。骨のある先生だったから。戦争中になびかない人なんて少ないですよ。

戦後はキリスト教は華やかになりましたけど、一番弾劾されている時のキリスト教でしたからね。でもそれを守り抜いて。・・・昭和15年にクリスチャンになって(戦争終結まで)あと5年間是非国民って言われてね。だから松山にいるときは、非国民。父は英語の教師だったし。

ホイテ先生っていう先生も、なかなか骨のあるいい先生でしたね。苦勞なさったんじゃない。戦争中だから。連合司令部の兵隊さんの所に勤勞奉仕に行く時も、ホイテ先生、真っ先に先頭に立ってね。やっぱりそういう時に後ろ指を指されないように、ミッションスクールは戦争に反対してるって思われないうように、一生懸命勤勞奉仕に、真っ先に行ってるね。<sup>17</sup>

戦争により、自分が尊敬し、信じていたものたちの評価が全く変わってしまうことを藤野は経験した。その中で、静かではあっても自分の信ずる処に従って行動し、大切な点においては決して譲ろうとしない佐藤牧師の姿は、藤野の心に信念を持って生きる人の姿として焼き付けられた。また、自分の大切な学校や生徒たちを守るためには、自分が先頭に立ってつらい仕事、自分の願わぬ仕事をも進んでするホイテ先生の姿。佐藤牧師の信念を貫く姿とはまた違う「人のために己を捧げて生きる」姿もまた、若い藤野の心に感銘を与えた。

#### ④保育を始めたきっかけ

藤野は、最初から保育を学ぼうとしていたわけではなく、松山東雲高等女学校では英文科に入学している。これについては「上級学校なんかに行かない(結婚する)人が家庭科に入って、英語科(ママ)っていうのは上級学校に行こうかなという人とか、知的なことが好きな人が入って…私はもちろん英語科に入った。」<sup>18</sup>とその理由を語っているが「父は英語を教えてくれて、英語科で英語の先生にさせたかったですけど。」<sup>19</sup>と言っているように。父親からの期待も影響していたようである。姉の陽子もまた英文科で学んでおり、卒業後更に補習科英文科(2年課程)で学んでいたところ、2年次になった段階で生徒が陽子ひとりになってしまうという事態になり、校長からの直々の頼みで石手川幼稚園に勤めることとなった。そして、藤野が陽子の職場である石手川幼稚園に遊びに行った時に「宣教師の残したかわいらしい英語の絵本」や「人形の家」などを見たことから「とにかく面白いことがいっぱいあって、楽しそうだから『ああ、私も幼稚園の先生になろう』とその時思った<sup>20</sup>。」と幼稚園教師をめざそうとしたきっかけについて語っている。そして、藤野が英文科を卒業し、いざ幼稚園に就職しようと願い出た時には幼稚園に空きがなかったことから、校長の発案で1年間に限り補習科英文科が補習科保育科となり、藤野は補習科保育科で学ぶこととなった。この時の教員の一人が、その後就職する松山東雲学園附設勝山幼稚園の主任で頌栄の養成所で学んだという和田先生である。その後念願かなって勝山幼稚園に就職するが、2年で園は震災により焼失。藤野は、母親とともに静岡の女子師範学校の国語の教官と結婚した陽子の元に身を寄せることとなる。それからほどなくして姉の夫は病に倒れ、未亡人になった姉に、たまたま近所に住んでいた静大附属幼稚園の田中勝雄主事(現在でいう園長)が紹介したのが静大附属幼稚園の教官という職であった。一方、バイブルクラスでタイプを学んでいた藤野にはお茶会社から「タイピストとして雇いたい」と声がかかるのだが、そのそばから「私ではいけませんでしょうか」と声を上げたのが、既に幼稚園に勤めていた陽子であった。陽子は東雲学園の補習科英文科でもタイプを習っていて得意である反面、現在の職である幼稚園の方にはあまりしっくりきていなかった。片や補習科保育科で学び、念願叶って就いたにもかかわらず幼稚園が震災で無くなり、保育の道が閉ざされてしまった敬子。ここでタイプが得意な姉と、保育の方が向いている妹が、互いに進む道を取り換えたことから、藤野にとっての40年近い静大附属幼稚園での教員生活が始まるのである。藤野はこのようないきさつについて「…だから自分で幼稚園の先生になろうとか、自分でこういうこと目指したこと一度もない<sup>21</sup>。」と語っている。クリスチャンでもある藤野にとって幼稚園教諭になった事は、まさに「与えられた道」と表現されるような出来事であった。

### 3.2 保育観への影響

藤野の生育歴より取り出した4つの出来事が、どのように藤野の保育観に影響を与えたかということについて検討する。検討するに当たり、藤野の保育観の特徴から①自らの信ずるところに依って行動する ②常識に捉われない自由な発想 ③弱者の立場から考える という3つの点について考察する。

#### ①自らの信ずるところに依って行動する

藤野は、生涯を通して自分が正しいと思ったことについてはどんな相手に対しても主張する強さを持っていた。それは次のエピソードにも表れている。

ヘファンン女史っていうのが戦後、アメリカから来て、日本の教育を視察しましたよね。全国回って講演なさったんです。静岡にもなんか、「質問があったらおっしゃい。」っていうのが来た時に、ある先生が手を挙げて「私の幼稚園では英語を教えています。子どもは記憶力がいいので、1日で単語をいくらでも覚えます。」って言ったら、他の人も「私のところでも英語教えています。」「私のところでも英語教えています。」って5、6人続いたんですね。で、私、英語を教えることも反対だけど、ヘファンン女史がいる前で「英語教えています。」「英語教えています。」っていうの癪にさわって。「何だ」って思って、ぱっと手

を挙げて「私は幼稚園で英語を教えるのは反対です。」ってそこまで勢いよく言ったんですけど、理由を考える暇がなかったので、それで思い出したのが「ポチよね」なんです。で、その「ポチよね」の話をしましてね。「今、私たちが幼稚園で子どもに英語を教えると『ホワット イズ ユア ネイム』みたいにカタカナ式の英語にどうしてもなってしまう。…でもほんとは“what is your name?”(注:これが日本語の「ポチよね」に近い発音になる)で、そんな風に教えると、かえって害があると思います。」って言ったら、わりあい皆さんが拍手して下さったんです。10年経ってふっと困った時に、それがふっと浮かぶってうか…。

22

この藤野の、どんな相手にでも怖気づくことなく主張する強さは生来持って生まれた性格や、両親からの教育によって育った正義感に依るとも考えられるが、3-1の③で述べた、女学校時代に会った牧師や教師達の、戦時下のキリスト教弾圧に対して毅然と自身の信念を貫く姿や、行動する基準は自分の信ずる処にあるという生き方を間近に見たという経験にも大きな影響を受けている。このような形で、生き方に影響を与える教育について、矢野は「私は、教育の起源を、共同体の外部に離脱した世俗外個人が、共同体の内部に戻る時に、共同体の構成員に出会うことから生じる 教える一学ぶ関係の成立にあると考える。」<sup>23</sup>と述べている。一般的に言われる教育とは、社会化すなわち所属する共同体の中で、様々な規範や果たすべき役割等を学び、その共同体内で生きていくための学びをすることである。しかし矢野はその、社会に同調しその内部で生きていくための術を教える教育を「発達としての教育」と呼び、いわゆる学校教育は、その最たるものであると言う。学校教育の中では、共同体内の価値観に基づいて生きていくことが目指され、そのために必要な力の育成という目標を掲げて教師たちが生徒を教え導いていく。しかし、それはあくまでも共同体内の有用性に基づく教育であり、その目的が市場原理に回収されてしまう危険性もまた孕んでいる。矢野は、「発達としての教育」の対極として「生成としての教育」という概念により、社会の中の有用性に縛られない生命性に満ちた学びの存在を示した。これは、溶解体験<sup>注3</sup>という、自己と世界の溶解すなわち我を忘れて没頭する体験から生まれる学びであり、このことにより人は社会の有用性の鎖から解放されて生命の全体性に触れ、自由感を得ることができると言う。そしてこの溶解体験を伴う学びをもたらす教師こそが、前述した共同体内の価値観を超えた存在「共同体の外部に離脱した世俗外個人」なのである。この“先生”から与えられるのが、共同体内の価値体系の中に位置づけられない見返りなしの贈与体験であるため、この純粋な贈与体験により弟子の所属する社会の秩序に亀裂が生じ、価値観が変容し、弟子の生き方に変容が起こるのだと矢野は言う。藤野が通っていた大街道教会で神の国について説く牧師や、学び舎であるミッションスクールの松山東雲高等女学校で、日本の一般的な学校での常識とは違う価値観をもって教えた教師達は、まさに世俗の共同体の外部から日常的な世界に戻った存在であり、第2次世界大戦によってキリスト者の思想弾圧が強められた時代にあってもなお、神に依って生きる姿勢を貫いた彼らの生き方は、藤野にとって純粋贈与体験そのものであったことだろう。このように「信念を持って生きる」ことを、身を持って示した“先生”たちの姿は、若い藤野の心に深く刻まれた。

藤野自身、この時の経験を振り返って「弾圧があって大変でしたね。でも、それに耐えて、つぶされないうぎりのところで妥協しながらきたでしょ。西村先生(松山東雲女学校の校長)はその苦勞がたたって途中で亡くなるの。でも私達は、そのキリスト教が弾圧された時にいたってことは強みなんです。戦後の華やかなときからじゃなくてね。」<sup>24</sup>と語っている。ここでの「キリスト教が弾圧された時にいたことが強み」であるという発言が表すものこそ、矢野の考える純粋贈与体験による「生成としての教育」の付与の証しではないだろうか。矢野は「私たちは共同体の一員として一人前になるとともに、もう一方で、共同体のなかで生きる以外の生き方も学ぶ必要がある。」と述べ「個人として生きるためには、人格の尊厳を持つことが不可欠であり、そのためには世俗的秩序の有用性の原理を超えた生を体験しなければならない。」とする<sup>25</sup>。藤野は、この有用性にとどまらない、信念に基づいた行動を取る大人との出会いを受けて、世間的な価値とは違う価値観による生き方が存在することを、心揺さぶられつつ理解したのであろう。このことが自身の信じる保育の考え方については、どんな相手であってもひるまずに主張する藤野の強さに



つながっていったのではないだろうか。

## ②常識に捉われない自由な発想

藤野は、長い保育人生の中で、時折周りが驚くような発想をすることがあった。その一つの例として、園長として最後の勤務地である東洋英和幼稚園での、園舎の改修に於ける工夫が挙げられる。新しく3歳児保育を始めるに当たり、保育室が必要となって保健室を活用することにしたのだが、窓を出入り口にするという常識破りの発想により部屋の前にある裏庭を遊び場とすることを試みたのである。この時の様子を藤野は「窓に掛けた梯子段で裏庭へ出入りする面白さも加わって4、5歳児にも人気がありました。」<sup>26</sup>と書いており、当時主任であり藤野の退職後に園長になった丹羽は「先生のユニークな事は、野草の生い茂る裏庭の開発と、そこへ出るため、窓を出入口と併用する発想からも充分窺える。」<sup>27</sup>と述べている。また、藤野はインタビューの中でも

3歳児をやろうと思ったら保健室。ここが保健室だったんです、元。小さいんですけどそのところに作ったんです。…梯子段がついているでしょ。窓、梯子段から上がって、とんとんとんとんと、向こうへ、窓、降りるようにしたの。(聞き手：それは東洋英和のお母さん達はびっくりしたでしょうね。)びっくりしましたでしょうね。…そしたら5歳児が「ぼくらの部屋にもそれが欲しい」って。ぼくらの部屋にも窓から出る階段作ってくれないかって頼まれて。…どんなところでも環境って、作る気があれば、できるんですよ。28

と回想している。一般的には、窓から出入りすることは行儀が悪いとされる事であるが、それが人を仰天させるような案であるとわかっていても、藤野は迷うことなく、しかも教育の場で実行している。それは「3歳児が庭に出やすい部屋にする」という目的のためにどう工夫するか、という視点を最重要視して考えた結果であり、実際に作ってみれば、予想通りその入り口は庭に出るだけではなく、そこからおやつホットケーキを庭にいる子どもに渡すなど様々な工夫が生まれる場となっていった。常識に捉われずに、子どもにとっての動線を一番に考えることにより思いがけない効果が生み出されたのである。専門家の実践における思考についてショーン(Schön)は、「実践者がみずからのフレームに気づくようになると、実践という現実フレームを与える方法には別のものがありうるかもしれないと気付くこともできる。」「フレームの自覚は、どのコミュニティに所属したらよいかというジレンマの自覚を合わせもつことにもなる。」<sup>29</sup>と複数のフレームの存在を知る実践者の、常識の枠にとらわれない思考の仕方について述べている。藤野は、女学校での教育から「個人の意思で選び取ることを尊重する」という当時の日本の教育の常識にはない価値観に触れ、自分の考えに基づいて行動することの重要性を知り、自身の中にあつた“教育の場”についての枠に気づく体験を得る。またそれ以前の「家庭生活の合理化」に傾倒し、自立した自由学園の卒業生の様子を娘に見せた母の影響からも、現状の生活を合理的な視点を持って見直し改革していく姿勢を学びとったことであろう。そして藤野は保育者としての仕事の中でも、常にその時々の教師集団の持つ常識の枠に埋没することなく、時には周囲と対立しつつも、教える側、与える側の常識や都合からではなく「子どもにとってどのような意味があるか」という視点をもって保育を改革し続けていくのである。

## ③弱者の立場から考える

藤野は「子どもを主体とする保育」を目指し続けた人だったが、それは「小さく弱い者の立場」を尊重する態度だとも言い換えることができる。それについては、次の様なエピソードがある。

6年生になって、受験する進学組っていうのと高等小学校に行く受験しないグループがあつたんですね。クラスが50何人いたんだと思うんですけど、先生は補習する受験クラスを南側のあつたかい席に固めま

してね。…母は私がミッションスクールなんて当然通るし、受験勉強しなくていいからって参考書の代わりにドッジボールを買ってくれましてね。それで高等小学校に行く人達と仲間になって遊んでたんです。…だから、J校に行くつもりでこっちにいたら、そんなこと一息が付きなかつたと思うんですけど。一番びっくりしたのは、受持ちの先生が授業中にもう私が手を挙げてても宛てて下さらないわけね。…それだけなら我慢したんですけど、ある時「末席」っていう言葉が出て来たんです。先生が「この部屋では末席はそちらだ」って高等小学校に行く方のグループを指されたんです。「上席」はこっちで。私、真っ赤になって腹立てて怒ったんだけど、私は元々女学校に行くんだから、本当に侮辱されたのは高等小学校に行く人達で、どんなに怒っているかと思ったら、周り見たら真っ赤になって怒っているのは私しかいなかったんですね。そういうことに慣れっこになっているって言いましょうか。<sup>30</sup>

この時について「自分が日向にいたら、そういうことに気が付かなかつたかもしれない。はじめに父達が、体が弱いこともあってミッションスクールを選んだために」と振り返るように、藤野は自身の身体が丈夫でないこともあって、いわゆる県立の一流校でないミッションスクールに進学したのだが、それを逆に、そのことによって日向にいたら気が付かなかつたことに気付けたと表現している。3.1の②に記述したようにこのミッションスクールの校長である西村は「どんなにでも出世できる道が開けていたのに、郷里である松山に帰ってミッションスクールに一生をささげた人」<sup>31</sup>であり、藤野の父親の友人であった。藤野の父親もまた、一校に入り将来を期待されていたものの、芥川龍之介、菊池寛などというそうそうたる面々と同期になったことで神経を病み、故郷に帰った経験を持つ。母親もまた、初婚に破れた後、藤野の父親と出会ったことにより再び幸せな家庭を持つことができた人である。このように藤野の周囲には、世間一般の価値観とは違う価値観をもって生きる大人がたくさんいた。また更に藤野自身も、決して万能な人ではなかつた。小学生の時には、1学年300人の総代に選ばれたものの、自信が持てず、小さい声でしか返事が出来なかつたという恥ずかしい思い出がある。父の期待を受け、英語の教師になるための文検を受験し落ちるといふ苦い経験もあつた。また静岡に引っ越してきた時に、実は静岡大附属幼稚園の前に勤めた園があつたのだが、その園が80人もの子どもを1人で担当するというような保育形態だつたため、1ヶ月で無理だと感じ、父に頼んで頭を下げに行ってもらって辞めている。藤野はこの経験について「ただただ勤まらないと思って逃げ出した」<sup>32</sup>と語る。藤野の性格や成してきた仕事を考える時、その大胆さや華やかさに目がいきがちであるが、このような人が持つ弱い部分—それは藤野自身も持っていたのだが—を認め、共感的に受け止める面があつたことを忘れてはならない。藤野は大学の教育学部の附属幼稚園という最も教育的な幼稚園と思われている園に長く勤めながらも、「何かが出来ようになる」といったいわゆる英才教育的なことを奨励することはせず、先に述べた矢野の言うところの「有用性の原理に基づく発達のための教育」ではない、子どもが夢中になって遊びこむといた「溶解体験」を重視した幼児教育を目指し、世間に発表し続けた。その根底には、ここに述べたような人の弱み—有用性においては—を持つ者に心を寄せる共感的態度があつたのではないだろうか。それらは藤野が自分自身や藤野を取り囲む人々が持っている弱さを受け入れ、世の中で評価されにくいものに別の価値を見出すという「弱く小さき者へのまなざし」から生まれてきたのだと考えられる。

#### 4 まとめ

藤野の生育歴の保育観への影響についての検討から、生育歴が保育観に与える影響について次の様なことが言える。

##### ① 純粹贈与体験を得ることにより人やものごとに対する基本姿勢が生まれる

保育者が育つ過程のどこかで、他者から何らかの純粹贈与体験を得ることにより、人を育てる上での価値

価値観や、他者に対する対し方に関する基本的な姿勢が生まれてくる。藤野の場合は、家族や牧師、ミッションスクールの教師などからであったが、人以外のものとの出会いである場合もあることだろう。その溶解体験的な出会いによって、自分を取り囲む世界や他者に対する信頼、共感的な態度といった、人と接する上での基本姿勢がつくられるのである。この基本姿勢は保育者本人の性格に起因する部分もあるだろうが、それのみで決定されるものではなく、経験した出来事によって変わっていくものであることは、藤野が最初から主張できる強さを持っていた人だったのではなく、同時に弱い部分も持っていた人であったことから明らかである。そして藤野の小学校6年生の時のエピソードや、ヘファナンの講演時の発言のエピソードからもわかるように、これらの基本姿勢に基いたふるまいは、考えてから行動するという類のものではなく、無意識に、気付いた時には既に行動してしまっているという形で現れる。保育者は、持って生まれた性格に加えて、生活上の様々な経験による深い出会いの中で、人への対し方を徐々に醸成させつつ、自分なりの保育に向かう姿勢をつくっていくのである。

## ② 自身のもつ枠を自覚し見直しながら自らの枠組みを確立していく

人の一番最初の枠は、育った家庭の考え方や雰囲気であろうが、長じるにつれ、所属した集団の中の枠に知らず知らずのうちに規定されて物事を考えるようになっていく。藤野の場合は、両親共に個性的な体験をくぐってきた人達であり、特に母親は、「生活合理化展」という当時の家庭婦人としては進歩的な考えを持つ人々との交流があった。小学2年生で既に藤野は、自分の住む町を客観的に見るような機会を持ち、他の価値観をもつ世界の存在を知る。そして更に、女学校では外国の文化や教育方法に触れ、今までの学校における教育の中の様々な常識を、目から鱗が落ちる思いで見直す経験をするのである。そして戦争によって世間の価値観が大きく変わった時、信念という変わらない枠組みをもって行動する牧師や教師を間近に見て、自身の行動の基とすることを決めたら貫くという姿勢を学んだ。このように何度か自身の枠について考える経験があったからこそ、藤野は「子どもを中心に考える」という自分の信念に基づく枠を保育の中心に据えることができたのであろう。そしてその保育姿勢がゆるぎなくあるのは、既存の借り物的な判断の枠組みに依らない、自身で作りあげてきた人間観に基づいた保育観が藤野の中に確立していたからではないか。このように保育者は、様々な人間観、教育観等の枠組みを知り、自らの枠組みを吟味していくことにより、保育観を熟成させていく。

## ③ 自分の内包する弱さを見つめつつ子どもと向き合う

信じることを貫く強さもありながら、人間的な弱みもまた藤野は多く持っていた。そして、他者の弱みについても敏感に察知し共感していた。保育者にとって、共感する力は、小さき者である子どもの「伝えたいけれどもうまく表せない気持ち」を察する上で最も必要とされる力であろう。藤野のインタビューの中では、両親の人間的な弱みについても隠さず語られただけでなく、自身の保育上での失敗体験も多く語られていた。「自分の弱さ」を包み隠さず語れるということは、世間の基準から測る強さ、弱さだけでなく価値基準を持っていたからだと言うこともできる。それは裏返せば弱さを持つ自分を認めることにより、世間一般の価値基準から解放されたということなのかもしれない。大人と比べてある意味で弱い存在である子どもと関係をつくる時、自分をどのような存在であると自覚するかによって、関係の結ばれ方が変わってくる。保育者が、自分の弱さを自覚しつつ人の弱さについて深く考えることは、どのような保育観をもつかということに関わる重要な事である。

以上、藤野の生育歴から保育者の保育観の形成について考察してきたが、藤野の経験してきたことは、藤野に固有なものであると同時に、保育者に共通なものでもあることも多い。今回、保育者の通った道筋を語りと記録されたものから追うことにより、数値には表せない微妙な心の動きを明らかにすることができた。今後も藤野の人生に深く分け入りながら保育者の保育観形成過程について探究を進めたい。

<脚注>

注1 1927年 婦人之友社『羽仁もと子著作集 1~15巻』の刊行を契機に1,000人の婦人之友愛読者によって1930年「全国友の会」が設立された。

注2 羽仁もと子が雑誌『婦人之友』を通じて訴えてきた衣食住に関する合理的な家庭のあり方を具体的な形で示した展覧会であり、全国の婦人之友友の会会員により開催された。合言葉は「家庭は簡素に 社会は豊富に」。

注3 矢野智司はこの言葉を作田啓一の理論から引用している。溶解体験においては自己と世界との境界が溶解し、有用性を超えて、生命性、至高性を生きることとなると述べている。

<文献>

- 1 清水陽子 (2005) 「保育者の保育観と実践力の形成について—阿南静江の経歴と活動を中心に—」 『西南女学院大学紀要』 Vol.9 pp.216-223
- 2 吉丘一志 (2007) 「保育士の成長を支える信念の形成過程. — ある保育士のライフヒストリーを中心に —」 『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第三部 第56号 pp.101-108.
- 3 梶田正巳 杉村伸一郎 後藤宗理 吉田直子 桐山雅子 (1990) 「保育観の形成過程に関する事例研究」 『名古屋大学教育学部紀要』 . 教育心理学科. vol.37 pp.141-162.
- 4 足立里美 柴崎正行 (2009) 「保育者アイデンティティの形成と危機体験の関連性の検討」 『乳幼児教育学研究』 第18号 日本乳幼児教育学会 pp.89-100
- 5 香曾我部琢 (2012) 「小規模自治体における保育者の成長プロセス—保育実践コミュニティの形成のプロセスに着目して—」 『東北大学大学院教育学研究科年報』 第60集 第2号 pp.125-152
- 6 金澤妙子 (1998) 「保育観と保育の実際」 『幼児教育への招待』 ミネルヴァ書房 p.10-13
- 7 森上史朗 (2001) 『保育原理』 ミネルヴァ書房 pp.19-20
- 8 小嶋秀夫 (1993) 「保育における児童観の役割とその文化的基盤」 森上史朗 (編) 『新・保育入門』 別冊発達 No14 p.124
- 9 小嶋秀夫 (1982) 「児童観研究序説—児童館研究の意義と方法」 三枝孝弘・田畑治 (編) 『現代の児童観と教育』 福村出版, p.19
- 10 矢野喜夫 (1992) 「児童観・発達観の構造と変遷」 村井潤一 (編) 『新・児童心理学講座1』 第2章 p.64
- 11 小嶋秀夫 (1988) 「人間発達と家族研究の中で」 村上英治 (編著) 『教育心理学の歩み』 川島書店 p.123
- 12 永倉みゆき (2018) 「保育観はどのように形成されるのか—幼児教育者 藤野敬子の足跡から—」 『日本保育学会 第71回大会発表論文集』 p.248
- 13 北條文緒 (2001) 「ヘンリー・ライクロフトの私記：日本における紹介と翻訳」  
The Private Papers of Henry Ryecroft : Introduction, Translation, and Reception in Japan  
東京女子大学比較文化研究所紀要 62巻 pp.39 -50
- 14 2016 (平成21) 年6月6日のインタビュー
- 15 2016 (平成21) 年8月14日のインタビュー
- 16 2016 (平成21) 年8月14日のインタビュー
- 17 2016 (平成21) 年9月7日のインタビュー
- 18 同上
- 19 同上
- 20 2016 (平成21) 年8月14日のインタビュー
- 21 同上
- 22 同上
- 23 矢野智司 2008『贈与と交換の教育学 漱石、賢治と純粋贈与のレッスン』 東京大学出版会, p.34
- 24 2016 (平成21) 年9月8日のインタビュー

<sup>25</sup> 前掲書 24 pp.47-48

<sup>26</sup> 藤野敬子 1994 「東洋英和との出会い—貴重な4年間をふり返って—」東洋英和幼稚園『東洋英和幼稚園創立80年の歩み』p.115

<sup>27</sup> 丹羽輝子「10年のあゆみ」 原本不明 p.9

<sup>28</sup> 2016（平成21）年9月8日のインタビュー

<sup>29</sup> 2007 ドナルド・A・ショーン, 柳沢昌一・三輪建二 監訳『省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房 p.328

<sup>30</sup> 2016（平成21）年8月14日のインタビュー

<sup>31</sup> 2016（平成21）年6月6日のインタビュー

<sup>32</sup> 2016（平成21）年7月4日のインタビュー

付記：本研究での藤野氏へのインタビューは平成21年度常葉学園短期大学教員研究奨励制度研究助成金の交付により鈴木久美子氏と実施したものである。  
また、本研究の一部を日本保育学会第71回大会にて発表している。